卓　　話

平成 18 年 3 月 28 日

「失われた責任感／CSR（企業の社会的責任とは）」

宮地正直 会員

▶ CSR（企業の社会的責任）が危急の課題としてクローズアップされている。それは最近、責任感・倫理観の欠如による企業の不祥事が後を絶たない反省からと「時価総額世界一になる」と豪語して拡大路線を突き進んだライブドアの転落によって、事業を通じて社会貢献とは何かを考えるきっかけから一気に加速したためだ。

▶ CSR（Corporate Social Responsibility）とは、顧客、株主、社員、地域社会、政府、環境などへの社会的・倫理的責任を果たすためビジネス慣行を通じて情報開示と透明性を徹底し、いかに企業価値を向上させるかである。
すなわち、信頼され、選ばれる企業への変革を目指す経営活動であり、新たな経営競争である。

▶ 社会全体にはびこる「無責任」と「モラルの欠如」を根源としたものが多すぎる。ライブドア的な手法は資本主義の自殺で、堕落である。企業活動は、付加価値を創造して、いかに利益を上げるかという仕組みと、その利益をどう使うかという二つのバランスを取ることが命だ。

▶ 日本の税制もここ 10 年、景気浮揚のために起業や株の売買で大金持ちになる人を増やす政策を取ってきた。そういう人達にとって「おいしい税制体系」が出来ている。とにかく株を持っていて損はしないという機運がみなぎっており、倫理価値観がない。

▶ CSR 経営を歴史的に振り返ると、近江商人の「売り手よし、買い手よし、世間よし」（三方よし）に通用するところが多い。（同志社大　末永教授）

(1) 自分の商品にその国の人々が満足することを何よりも優先させよ。（顧客第一主義）
(2) 行商の結果として、高利を望んではいけない。利益を得られるかどうかは天道の恵み次第である。（薄利の徹底）
(3) 遠い他国まで行商に来た以上は何とか儲けたい、というような自分本位な私的欲望を抑えること。そのために神仏への信心を深めるよう。（信・義・仁）

人生の目的はまっとうに働くことである。勤勉によって得た利益こそ真の利益であるから、正直に家業に精を出すことが大切である。したがって、買置きや相場に手を染めることは子々孫々、一家一門に至るまで禁制である。

すなわち、社会貢献しながら、薄くはあるが正当な利益を積み上げる近江商人の手法は、強い企業体質を築き、結果として大商人への道につながった。

近江商人は、商いには、世間よしという社会認識に気付いていたのである。

▶　かように企業の社会的責任を追及していくと「誠実であれ」「正直であれ」という方向へいく。
吉田松陰先生は「至誠にして動かざるも、いまだこれ有らざるなり」（誠をもってなし得なかったことは、この世にない）
アダムスミスは「正義なき自由主義は崩壊する」とその原点は道徳哲学にある。
あの有名な北尾氏は、「判断基準に『徳・義』を置いている。すなわち、『事業の基は徳』『利の基は義』であり、徳がなければ事業は成功しないし、正しいことからしか利益はでない。そして徳・義は汗をかいて、本業をまっとうするところから生まれると信じている。」

▶　私は、さらに「誠」と語を大切にし、「誠を尽くし、凛とせよ」をモットーにしている。人も会社も「誠実」でなければ成長、発展はなく、誠実でなければ、すべてが崩壊する。

▶　今、社会のあちらこちらに「肥満」がみられる。今一度身の回りを見直し、身を軽く、過ぎたる欲を離れ、本業の事業（IT）に根ざした社会貢献をし、一市民として責任を果たすということです。（ITは、水、学校、診療所と同様のインフラ＝イラクの求める援助）

論語に「過ぎたるは　なお及ばざるが如し」とある。より多くの金は身を滅ぼし、求め過ぎると何も得られない。

▶　ロータリー四つのテスト（言行はこれに照らしてから）は正に以上のことを言っている。
(1) 真実か どうか（誠実、正直かどうか）
(2) みんなに公平か（自分本位な私的欲望はないか）
(3) 好意と友情を深めるか（人々が満足することを優先しているか）
(4) みんなのためになるか どうか（社会貢献・責任を果たしているか）

以上、雑学・雑感です。

宮地　正直